

### Ⅲ 現代国語と古典の分野のつながり

#### 国語科教育法の実践的研究による検討

酒 井 為 久

国語科教育の流れを、小・中・高と発達段階に沿って実践的に検討すること、及び、高校段階を特に取り上げ、現代国語と古典の学習指導法を研究すること等については、これまで各種の実践研究を行なってきた。そういう研究を、大学の一般教養の文学にまで延長して検討し直す機会を、49年度に椙山女学園大学の非常勤として与えられたので、高校段階で科目現代国語と科目古典に分けられて学習指導されている教科内容のかかわりを問題にしたり、両科目の間を埋める国語科教育内容は何かを考えながら、国語教育の見地に立った文学を実践してみた。以下は、紙面の制約に従いその項目だけであるが、私にとって全く新しい視点からの国語科教育の検討となった記録である。

#### (1) 文学という語

西周と森鷗外に共通する風土的性格と時代的背景の中から、西が literature の訳語に文学を当てたこと、鷗外が美文学・純文学という語を使用したこと、並びに文学という語の持つ意義、及び、啓蒙期、啓蒙思潮について理解していく。

#### (2) 子規の俳句革新

子規の代表句の決定方法として、現代国語の全教科書を統計的に使用した。その句の持つ意義を戦前の高等女学校の教科書の教材「木曾の棧」との関係でとらえ、子規における旅と子規の俳句革新の情熱の由来するところを探る。

#### (3) 「俳人蕪村」について

子規を伝記の上から研究し、「俳人蕪村」の占める重みを知る。同時に、蕪村が没して百十六年目に「俳人蕪村」が出るまでの蕪村関係の事跡を調べ、「俳人蕪村」の緒言を教材として、子規の俳句観（文学観）を読み取る。

#### (4) 離俗論の世界

蕪村の代表句の決定方法として、古典（古文）の全教科書を統計的に使用した。その句の世界を、「春泥句集序」を読み、離俗論と南宗画について知り、子規の見解との差異に触れるようにした。蕪村略年譜を添えて参考とした。

#### (5) 萩原朔太郎の蕪村観

ものの見方の多面性を自得できるように、一つの中心をめぐって、いくつかの事例を教材として扱う方針

である。「竹」「小出新道」、朔太郎の略年譜のほか、「郷愁の詩人と謝蕪村」「蕪村句集議義夏之部」李白の「登金陵鳳凰台」である。

#### (6) 歌仙（形式）の味わい

蕪村の「桃李」を使用して、歌仙様式についての解説や歌仙が個の芸術ではなくして、調和の芸術であることを理解した上で、桃李を読解していく。近代的感覚とは別の文学が存在することに気づき、俳諧というものに目を開くようにする。

#### (7) 蕪村「炉辺」と俳体詩

蕪村の、恐らく最後の新体詩である「炉辺」を教材として扱い、そこに見られる蕪村の影響を味わい、新体詩と俳体詩の関係について調査する。「北寿老仙をいたむ」も教材として、そこに見られる近代性を鑑賞していく。

#### (8) 若菜集と落梅集から

では、蕪村の詩境は何か。叙情詩の伝統と表現形式とのかかわりを心に置きながら、「潮音」「初恋」「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情のうた」「椰子の実」「草枕」を教材とする。蕪村略年譜について理解する。

#### (9) 乙二の蕪村発句解

蕪村発句に詠まれた故事出典の説明の材料として、「枕草子」翁丸の段を引用する。乙二の伝についての研究と函館の地において、蕪村の俳諧が忘れられた頃に「蕪村発句解」が出版されたことの意義について解説する。

#### (10) 俳文・洛東芭蕉庵再興記

洛東芭蕉庵再興記を読み味わい、芭蕉から蕪村への詩精神について理解し、蕪村の世界を再認識する。次いで、「幻住庵記」を読み味わい、芭蕉の人生観について知ると同時に、近代の詩人達への遺産として何かあるのか考える。

#### (11) 「冬の日」と芭蕉の旅

野ざらし紀行のうちの名古屋に関する部分、「冬の日」の一部を取り上げ、「冬の日」の前後を中心にして芭蕉の旅と俳諧について理解を深めるとともに、俳諧の風土性とか、芭蕉の生涯のいくつかの曲折点を追体験してみる。

#### (12) 新しい国語表記

ここで、文学は文字によって表記されること、それを読むことが条件となっていることの確かめを行ない、国語表記の歴史を振り返り、「当用漢字音訓表」「送り仮名の付け方」の概要を説明した。表現内容だけに目が行きがちなことに対する反省の意味がある。

### 13) 「猿蓑」の境地

芭蕉の理念を「夏の月の巻」の読解を通して把握すること、芭蕉の理念が固定化したものでないこと、発句の世界と俳諧の世界の違いについて等を理解することがねらいである。発句と自然、歌仙と人事にまとめることもできよう。

### 14) 竹の里歌と近代短歌

再び、子規にもどって竹の里歌を取り上げることにした。それとの対照として、與謝野晶子「みだれ髪」北原白秋「桐の花」を使用した。また、現代国語の全教科書に載っている近代短歌を代表作選定の基準として利用した。

### 15) 「たけくらべ」その一

今回から、後期ということで散文の方面に教材を移すことにした。文庫本の使用である。樋口一葉年譜と「伊勢物語」の一節、大音寺前の地図を参考にして、講読の形で順次読み進んでいくのであるが、細部にわたって解釈する余裕はない。

### 16) 「たけくらべ」その二

登場人物一覧表を「たけくらべ」の1節から16節までに分けて作成し、人物像を明らかにする。その一方で、言文一致運動との関連で「たけくらべ」の文体の特色を理解し、説解の障害となる文体上の問題点を明確にしていく。

### 17) 「たけくらべ」その三

西鶴の文学と一葉の文学のつながりを「たけくらべ」の読解の中で具体的に指摘すること。「みづの上日記」の「たけくらべ」に関する部分を読むこと。「めざまし草巻四」の関係部分の読解。以上のことを付加しながら文庫本を読み進んでいく。

### 18) 「たけくらべ」その四

「たけくらべ」読解のまとめをする。そして、文学史的な解説から進んで、文学史的な価値を知的に理解できるようにする。現代国語と古典の接点の作品の一つとして、主人公・美登利の生き方をその時代背景とともに把握する。

### 19) 「浮雲」その一

「浮雲」を読み進んでいくのだが、細部については自習の形をとる。二葉亭四迷と坪内逍遙の略年譜を使

用して、この両者のかかわりと近代小説の誕生についての知識を得る。作者二葉亭の伝記についてはややくわしく調べる。

### 20) 「浮雲」その二

第一編、第二編、第三編に分けて人物像を明らかにし、各編の内容の特色をつかむ。石橋忍月の批評を手がかりにして鑑賞する。手記「くち葉集」「落葉のはきよせ」「作家苦心談」を参照する。柳田泉「浮雲を中心にして」を参考にする。

### 21) 「浮雲」その三

文体の問題を取り扱う。円朝怪談集との関係と言文一致運動の先駆の役割を知る。次いで、写実主義の作品がロシア文学の影響による産物であること。「小説神髓」とのかかわりと近代文学史上の位置を理解する。また、お勢の生き方中心に作品を見直してみる。

### 22) 江戸文学（小説）の流れ

御伽草子、仮名草子、浮世草子、赤本、黒木、青木、黄表紙、合巻、洒落本、人情本、滑稽本、読本等について解説し、明治に入ってから戯作、啓蒙思潮期の文学、翻訳文学、政治小説、写実主義文学等について文学史の流れを理解する。

### 23) 「菊花の約」その一

前近代の作品として「雨月物語」から一編を選ぶ。ねらいは、「たけくらべ」「浮雲」との比較においてあり、読本の読解にも慣れるようにする。上田秋成略年譜により「雨月物語」の位置を知る。

### 24) 「菊花の約」その二

范巨卿難黍死生交との関連について解説し、作品の背景と情景描写に見られる先行作品の影響を指摘し、近代小説と異なった点を認識する。主人公赤穴宗右衛門の人物像の写実的などところと現実を離れたところを読み取る。

### 25) 「吉備津の釜」その一

同じく、「雨月物語」から女性の登場する物語を選んで、美登利、お勢の生き方とこの物語の磯良の生き方とを比較して読むことにする。「牡丹燈記」との関係部分と怪異出現の描写のすばらしさを読み味わうようにする。

### 26) 「吉備津の釜」その二

この物語のもつ古代性について考え、舞台となった吉備津神社の果す役割りに注意する。近代小説と「雨月物語」（文庫本にはその現代語訳も添えてある。）の世界との差異についてまとめ、現代国語と古典のつながりを知る。

以上